

こくざらほ くにほんじん ようせいの こうぎ

国際派日本人養成講座

伊勢雅臣

美しい日本への道

鍵山秀三郎「大きな努力で小さな成果を」から

1. 「トイレのそうじをする」と私の心もみがけたような気がした」

「大きな努力で小さな成果を」という言葉をついたタートルの本が出た。現代の常識では「小さな努力で大きな成果を」だが、その逆張りである。

著者の鍵山秀三郎氏は自動車用品販売チェーン「イエローハット」の創業者で、10万人以上が参加するNPO法人「日本を美しくする会」の提唱者でもある。氏のトイレ掃除を通じた教育改革に関しては、雑誌480号「心を磨くトイレ掃除」Aで紹介されていた。

そこでは大分県小学校5年生、足立弥生さんの作文の一部を引用した。

2. 「会社は人の心をきれいにしていくためにある」

鍵山氏は会社経営も「心を磨く」ためにやってきた。「本来、会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだ」と思っています。「鍵山(以下同、P77)」

「社員が心荒れたまま、いくら売上げが上がっても、その利益は何の価値もない」[P63]

「どんなに立派な業績を上げたところで、社員が心がすさむような経営のやり方はよくありません」[P85]

鍵山氏はこの信念を貫いて、「イエローハット」の経営をしてきた。

昭和四十四(1969)年からは二つの大手ビッグストアと取引を始めた。しかし、二社との取引を進める中で、「こんな商売の仕方では、ずっと仕事を続けていくことはできない」と思い、社業全体の六割にも及んでいた二社との取引を両方ともやめることにしました。

相手の営業マンが無理難題、派閥問題、そして無理な価格を押し付けたり、さらにはそのときの気分次第で、わが社の社員を人間以下のように扱ったりするなどのため、社員たちがどんどん精気をなくしていったのです。・・・そういう仕事をしていると、たとえそれによって自分の会社が儲かっても、社員が悪くなると思い、取引を絶つたのです。[P18]

3. 事業は国家を良くするための手段

人の心を汚す企業が増えれば、世の中は確実に悪くなる。

私が危惧するのは、世の中に蔓延する度を越した効率主義と競争主義です。・・・自分だけが勝てばいい、それが幸せにつながるのだ、という間違えた発想です。自分だけが幸せになりたいという自己中心的な考えです。日本の国家がよくなるには、国家を構成する一人ひとりの人生が幸せに満たされるでしょうか。国家がよくなるに自分だけが幸せを享受できるはずはないのです。

私は、微力ながら自分のできることを通じて日本の国を少しでもよくしたい。それが私の、心からの願いでもあります。[P11]

4. 「社長が朝からトイレ掃除なんかしているような会社じゃ、将来の見込みがない」

鍵山氏が社員の心をきれいにするために始めたのが、掃除である。

氏は、昭和8(1933)年に東京で生まれた。戦争中には家が空襲で焼かれ、郷里の岐阜に疎開した。食べ物にも事欠く生活だったが、家での掃除は徹底的だった。

玄關の格子戸の襷はやがて細くなり、家の柱は角が丸くなりました。それほどまでに一日に何度も拭き掃除が励行されたのです。これは掃除を怠れば、家人の心はずきみ、言動はやがて粗悪になるという両親の信念からの行いだっただけに思っています。[P8]

両親の信念を受け継いで、会社を創業してまず取り組んだのが、掃除、とくにトイレ掃除だった。と言っても、社員に命じたのではない。社長一人で黙々と始めた。

最初はみな、無視、無関心でした。社内の人からも取引先からも、銀行さんからも、

「社長が朝から雑巾・バケツを持ってトイレ掃除なんかしているような会社じゃ、将来の見込みがない」と言われました。

私が会社に朝早く行って、トイレ掃除をして社員を迎え、皆が出てきて汚してしまっ。その汚したあとを掃除すると、また汚す。・・・この繰り返しでした。しかし、私は、絶対これは大事なことだからと信じてやり続けました。[鍵山 P30]

5. 「変哲のない凡事も、徹底すればやがて非凡になる」

鍵山氏がトイレ掃除で笑いのものになっていた頃、鍵山は毎日トイレを磨くことによって、美しさを磨いていくと、それによって成功すれば、日本の経営コンサル事業の成功とそれによる「世間良し」もいってくる。

これを筆者は、「事業を成功させるためには、まず人作りが前提」という意味で捉えていたが、その理解は浅かったようだ。

事業は「世間良し」のためにある。とすれば、人作りこそ企業の最大の社会貢献であり、最重要目的であると考えた方がよい。そして人作りが成功すれば、事業の成功とそれによる「世間良し」もいってくる。

6. 「真のサービスとは、人格を磨くこと」

鍵山氏は「真のサービスとは人格を磨くこと」とも言っている。社員の心を磨くことで、顧客の心に響くサービスができる。こんな事例があった。

鹿児島市は、風向きの関係で夏に桜島の火山灰がたぐん降り降ります。この鹿児島市内のお客様を訪問したとき、あまりにも灰がひどかったので、うちの社員がお客様のお店の入口に車を停めました。

私が「駄目だ」と言いましたら、「いや、でも今日は空いているからいいじゃないですか」と言う。空いているも駄目だ」と言う。一度停めた車をずっと隣のほうに向けて停めさせました。とても大きな駐車場だったので、駐車場の隅からお店まで行く間に、服が火山灰で真っ白になりました。

でも、そうして行ったとき、向こうの社長が「さき、車を移動しましたね、どうですか」とおっしゃいました。私は「やあ、それはお客様が来たときに一番停めやすいところを空けておかないと申し訳ないで移動しました。車の後ろを店のほうに向けておかないで、め方は申し訳ないで、頭を向けました」と返答しました。

7. 「美しい日本」を作る道

「二生懸命やっている姿は、みんな美しい」とも、鍵山氏は言う。2時間もトイレ掃除に集中して、「みんな私(僕)はやったぞー」という顔をしており、かがやいていた。かがやいていた」という子供たちの姿は、想像するだけで美しい。

この感性はどこから来るのか。進化人類学の説くところでは、爪も牙もない人間は共同体の中で互いに助け合いながら、生き抜いてきた。その共同体を築くために利他心が本能として発達した、と説く。とすれば、「二生懸命、他者のために尽くしている姿を美しい」と感じるのも、利他心の本能からだろう。

掃除は、心を美しく磨く。そして他者はその姿を美しいと感じ、美しい心が周囲に伝播して、日本を美しくしていく。一人一人が「大きな努力で、小さな成果」を目指して心を磨いたら、結果的には「美しい日本」という、はるかに大きな成果、にちながっていくのである。(文責 伊勢雅臣)

※これを読めば自然に、日本の文化や歴史に関心がもてるような話を毎週掲載しています。より多くの二世の方や日本語学習者に読んでもらい、少しでも日本に興味を持ってもらえるよう、最寄りの日本語学校や日系団体の掲示板に張ったり、普段は邦字紙を読んでいない兄弟や子や孫などに記事を紹介してください。

(ニッケイ新聞編集部)

事業の成功は「人作り」の副産物だ、と気付いた。経営がうまくいかない店には共通点がある。今すぐできることをやらない。簡単なことをやらない。それが度重なるとうとうしようもなくなっている。しかもそのような店になっても、今すぐできることがある。毎日掃除をする。平凡なことが非凡になる。積尊の高弟・周梨葉特のように、愚か者と見られていたが、積尊の教えを守ってひたすら掃除をし、深い悟りに達した教えもあるのではないかと、鍵山P77]

当たり前のことを当たり前に、ベルでやる事を、鍵山氏は「凡事徹底」と呼び、こう説明する。

そもそも、仕事とは単純で単純なものです。傍目には派手に見える仕事でも、その本質は地味な努力の積み重ねにあって、突き詰めれば、たいしての仕事は「非凡」を求めない。凡事がおろそかにならず、結果として何も得ることがない。世の中には、そういう失敗が多いのではないだろうか。

「変哲のない凡事も、徹底すればやがて非凡になる」

イエローハットは連結で732店、社員数35000人、売り上げ1400億円の大企業に成長したが、それこそ「凡事徹底」で社員の心が磨かれた副産物だろう。

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

「会社は世の中をよくするために、人の心をきれいにしていくためにあるべきだと思います」

国際派日本人養成講座作者 伊勢雅臣氏の厳選シリーズ第3弾!

世界が称賛する日本の経営

1冊100レアル 限定販売 残りわずか!

世界が称賛する日本の経営 伊勢雅臣

「日本の経営」は、近年の日本企業は、欧米の株主資本主義的経営こそ最新の経営と思いつき、「三方よし」を追求する日本の経営を時代遅れと考えているようです。

しかし、人間が成長する存在であることを考えれば、日本の経営の方が経済的パフォーマンスも良く、人々や社会を幸福にするパワーもはるかに優れています。この日の優れた欧米企業はそのことに気づき、日本の経営を咀嚼し、追及しています。

本書は、先人の足跡をたどることで、読者に日本の経営とは何かを思い出してもらおうことを目的としています。それができれば、日本の企業人、企業、日本国全体が、活力を取り戻すと信じています。

【お問い合わせ】ニッケイ新聞編集部 TEL: (11) 3340 - 6060

【郵送の注文は日系書店まで】太陽堂:(11)3208-6588 / フォノマギ竹内書店:(11)3104-3399 / 高野書店:(11)3209-3313

国際派日本人養成講座 発行人=伊勢雅臣 (文責) Mail: ise.masaomi@gmail.com Twitter: https://twitter.com/ise_masaomi 無料購読申込・取消: http://blog.jog-net.jp/

徳力啓三 知っておきたい日本の歴史

(6)

第1節 武家政治の始まり

「天子摂関御影」の清盛肖像(南北朝時代) (藤原豪信/Public domain)



保元の乱とは、後白河天皇と崇徳天皇との間の激しい対立からおこった騒動です。これに、勢力を伸ばしていた藤原氏の兄弟や、有力な武士たちが二手に分かれて加担し、戦いが始まったのは1156年でした。戦乱は小規模だったが、都を争いの解決に、武士が大きな力を発揮した。

この乱は武士が政治への発言力を増やしていくきっかけとなった。藤原氏出身の僧・慈円が書いた『愚管抄』という歴史書では、この乱から「武士の世」に移ったとして、庄園を手に入れ、全国の

頼朝は朝廷の命をうけ、弟の義経を派遣し、平氏の討伐に向かわせた。義経は幼い安徳天皇とともに都から落ち延びていった平氏を各地の合戦で討ち、1185年ついに

平氏滅亡ののち、源頼朝は1185年、地方の国ごとに、守護をおき、荘園や公領には地頭を置くことを朝廷に認めさせた。守護は、郡司や警察の仕事につき、地方の政

治にも関与した。地頭は年貢の取立てや、土地の管理などを行った。一方、義経が兄である頼朝と対立し、平泉の奥州藤原氏のもとに逃れると、頼朝はその勢力を攻め滅ぼし、東北地方も支配下に入れた。



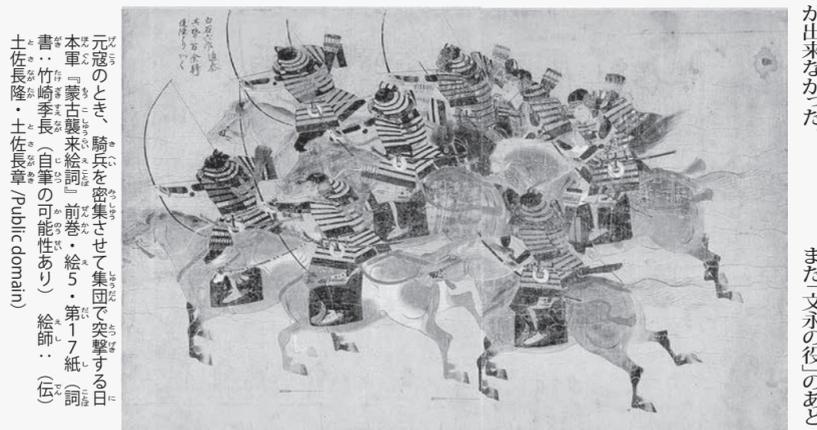
源平合戦の壇ノ浦の戦い (Unknown author/Public domain)



伝・藤原朝臣肖像 (Fujiwara no Takahobu/Public domain)

《補講》 武士のおこりと鎌倉幕府

13世紀の始め、モンゴルの支配を拡大し、モンゴル(蒙古)の高原で、ル帝国は強大な領土を築き、ジンギス・ハーンが遊牧民、その部が中国であつた。この動きに、ヨーロッパ人は、一致して、これを追いついた。モンゴル人は、北条時宗を中心として、元朝の興に備えた。1274年、元・高句麗の襲来を受けた。このとき、外敵との戦いであつたので、新しい土地を確保できず、幕府は充分な恩賞を与えることが出来なかつた。



幕府は御家人に防塁の建設や異国警備番役などを命じるなど、外敵への備えを強化した。これにより御家人は重い負担のしかかり、幕府に対する不満がつのつた。この頃に御家人は兄弟による分割相続の繰り返しが、領地が次第に狭くなり、生活の基盤が弱くなつていった。その上に商工業の発達で武士も貨幣(銅銭)を使うことが多くなり、領地を質にしたり、売つたりするものも現れた。幕府は御家人を救うため、ただ取り戻せるようにしようとしたが、お金を御家人に貸す人が居なくなつてしまひ、かえつて御家人を苦しめる結果となつた。

《補講》 仮名文字と女流文化

9~10世紀になると、私有地である荘園が広がって、国司や郡司の権限が及ばなくなった。都でも地方でも盗賊が出没し、治安が乱れた。朝廷でも中央の貴族たちは、武芸を職業にする者たちによって、宮中や貴族の屋敷を護衛した。また地方でも、国司として赴任しそのまま住みついた一族や、地元の豪族の中に、土地を守る為に自ら集団で武装する者があらわれた。こうして、武士が登場した。武士は、皇族や中央貴族の血統をくみ、また指導者としての能力に優れたものを棟梁として主従関係を結んで武士団をつくつた。中でも、天皇の子孫とされる源氏と平氏がひきいる武士団が、特に有力だつた。10世紀の中ごろ、関東の豪族・平将門と瀬戸内地方の国司であつた藤原純友が、武士団を率いて叛乱をおこした。これらの叛乱をしずめるためにも、中央の貴族は、武士の力を頼らなければならなかつた。11世紀のなかばすぎ、170年ぶりに藤原氏を外戚を持たない後三条天皇が即位し、みづから政治を行った。これによって藤原氏の勢いは抑えられた。天皇は藤原氏の荘園を含む多くの荘園を整理する法令をだした。その流れを受けついで白河天皇は、14年間在位したのち、幼少の天皇に皇位を譲り、白河上皇として天皇の後ろだてになつて政治の実権をにぎつた。この政治を院政と言う。摂関政治は、天皇の母方の一族が実権を握る政治だつたが、院政では、天皇の父や祖父が、朝廷のしきたりにとらわれない政治を行なつた。鎌倉幕府成立までの約100年間を院政期というが、その後も院政は続いた。院政が始まると、白河上皇は、平氏を中心とする武士団を、「北面の武士」として院の警護に重く用いたのち、武士の台頭をうながした。11世紀後半には、東北地方で2回にわたつて戦乱がおこり、関東の武士を率いてこれを沈めた源義家が、この地方の武士の信望を集めるようになった。

《補講》 元寇と朝鮮半島

1274年と1281年の2回にわたつて、モンゴル帝国は日本を襲いました。初回は3万人、2回目は14万人の兵隊が日本に攻め寄せました。初回の襲撃で、博多湾に入ってきた元軍を日本の武士は勇敢に迎え撃ち、命を惜みず戦いました。敵は夕暮れが近づくと、船に引き上げ、翌朝には撤退してゆきました。2度目の襲来では、長崎県の平戸に結集し、博多湾を目指して伊万里湾の入り口まで迫ってきました。これに対して日本の武士団は、全力を持って船で元軍の大船団に挑みました。昼夜に及ぶ戦闘で、大きな被害を受けた元軍は、その場に釘付けとなりました。その後、台風が元軍を襲ひ、大部分の船が荒波に飲み込まれていきました。2度にわたつて襲来した元軍は、日本を占領することが出来ませんでした。最初の元寇で元軍は、対馬、壱岐や博多で民家に火をかけ、老人、女性、子供の区別なく残忍な仕方で殺害したり、捕虜としてつれさりました。古代より、朝鮮半島は、そこを通じて大陸の文化が日本に入ってくる懸け橋でした。しかし朝鮮半島から大軍が襲来した元寇の恐怖の体験は、日本人の朝鮮半島に対するイメージを変えました。のちの明治時代に、政府は「朝鮮半島がロシアの勢力圏に入ると日本の安全が脅かされる」と警戒心を抱きました。そこにはこの元寇の体験が陰を落としていたのかもしれない。

《資料》 武家政治と将軍

征夷大將軍とは、朝廷の支配の及んでいない地方を征伐するために、天皇から任命された、軍隊の総指揮官を指す名称であつた。鎌倉幕府以降は、武家政権の首長の称号となり、単に「将軍」と呼ばれるようになった。将軍の住居のあるところを幕府と呼んだ。それが転じて、武家政権を示す言葉となった。鎌倉幕府では9人の将軍、室町幕府と江戸幕府では夫々15人の将軍が任命された。将軍がいた時代を武家政治といい、約700年続いた。

この頃には、御家人は兄弟による分割相続の繰り返しが、領地が次第に狭くなり、生活の基盤が弱くなつていった。その上に商工業の発達で武士も貨幣(銅銭)を使うことが多くなり、領地を質にしたり、売つたりするものも現れた。幕府は御家人を救うため、ただ取り戻せるようにしようとしたが、お金を御家人に貸す人が居なくなつてしまひ、かえつて御家人を苦しめる結果となつた。

